海外思潮

獨逸學者の戰爭論

獨逸の哲學者等は一齊に今度の戰爭に於ける自國の態度を辯護し、盛んに敵國を罵倒して居る。有名なる**オイケン**教授の如きも極力英國の態度を非難して獨逸の正當を主張して次の如く言つて居る。

英國は唯だ獨逸を擊破す可き不意なる機會を待つて居たのである。然るに自己の狹量を裝ふに禮儀の名を以てし、國民の野蠻性を覆はんが爲に、獨逸が一度止むなき必要より白耳義の地を侵すや、直ちに之を以て宣戰の口實とした。さり乍ら若し地を換へて佛國が必要上白耳義の中立を侵したとて、英國は決して佛國に宣戰する樣な事を爲すまい。若し佛國が獨逸の如く中立を蹂躙した場合には、英國人は之を以て避け難き國際法違反であるとか、人道の爲であるとか言つて、僞善者の涙を流す事であらう。英國人は實に古へのパリサイの徒に比す可き僞善者であると。

オイケン教授は尙ほ之でも滿足が出來ぬと見え、更に有名な**ヘッケル**教授と連署して、米國諸大學及諸學者に對して檄文を飛ばし、同じく盛んに英國を罵倒して居るが、文中吾が日本帝國に關する聞棄にならぬ一節がある。曰く——

數ある英國の非行中、最も甚しき一事は、英國が日本を唆かして支那に於ける獨逸領に嫌忌す可き侵略を敢てせしめた事である。こは歐洲及米國を犧牲にして迄も蒙古國民の勢力を強大ならしめるものである。英國は唯だ自國の利益にのみ驅られて、歐洲文明全體に對する叛逆を企てしめるものである。今度の日本の盜賊的行爲の共犯者たる英國をして、これ迄通り道德の監護者顏を爲せて置く事は決してならぬと。

獨逸第一流の歷史家にしてライプチッヒ大學教授

白川生

なるラムプレヒト博士は、若し戰爭が始まらなかつたならば、オイケン教授と相前後して吾國に來遊するやの噂あつた學者であるが、これまた英國及び吾國を罵つて次の如く述べて居る——

わが獨逸の文明は、今や渾然として、世界を一ならしめつゝある時に際し、茲に一個の背進者が現はれた。吾等は固より之を撲ち懲らさればならぬ。吾等は今度の戰爭を以て、獨逸が全人類のために奮鬪しつゝあるものなる事を主張する。英國の文明が蒙古文明と同盟せるは既に方向を誤れるものである。獨逸は飽迄も歐洲の文明を保護し、戰爭の後は世界を悉く獨逸化せしめる天職を有して居ると。

獨逸學者に對する米國學者の駁論

オイケン及びヘッケル兩教授が、米國諸大學及び諸學者に檄文を飛ばし、獨逸は强要せられて止むなく生存の爲に戰ふものなりと主張し、英國及び吾國の行動を罵倒せるに對して、米國の有識者、プリンストン大學教授マザー氏は激しき駁擊を加へて次の如く言つて居る。

予は一個の大學教授に過ぎぬ。而も獨逸思想界の泰斗たる二大學者が、自國の非行を曲庇し、我田引水の獨逸新聞の記事を見て、眞正の事實を顧みず、不當なる侮辱を英國に加へつゝあるを見ては、わが職務に對しても默する譯に行かぬ。兩教授よ、文明の行動とは果して斯くの如き淺薄なるものなるか、教授等が普及を企てて已まざる理性の發達とは、皮膚の色と言語との異なる人種に對し、憎惡と嫉妬とを抱いとの意味であつたのか。吾等は是迄常に米國の青年に對して、歐羅巴の文明と藝術と文學とを推賞して來たが、今にして之を思へば忸怩たらざるを得ぬ。凡庸の人間ならば措いて問はぬ、苟くも兩教授の如き學者が、衆愚と歩調を一にして自國を自慢するに至りては、吾等をして非常なる失望を感ぜしめるものである。軍國主義の魔力の下には、二大學者も眞理の光を輝かすことが出來ぬ。これは何たる悲慘な光景であらうと。

而して紐育タイムスもまた兩教授の檄文に對して反駁を加へて次の如く言つて居る

獨逸思想界の泰斗が斯樣の言論をなすは、誠に嘆かはしき事である。二大學者が米國の輿論を動かさんとせる計畫は失敗に終られねばならぬ。米國の中樞は、決して獨逸の學者や法律家や公人の辯論

「道」第80号(1914.12)

によりて左右される樣なものでない。若し假に二大學者の言の如く、獨逸の態度は道德的に承認せらるべきものとすれば、若くはまた獨逸は戰爭の張本人に非ずして露英の爲に止むなく强要せられたるものとすれば、何故に條理によりて米國民の心理に正確なる了解を與へる事が出來なかつたが。獨逸人は敎育ある國民である。而れども米國人もまた無學の國民ではない、公平なる批判を加へる能力ある國民である。かの獨逸人が、この米國人の中樞を動かし得ぬのは抑々何の故であるかと。

米國敎授の對獨開戰論

獨逸は有らゆる手段を講じて米國の輿論を動かさうと努めて居る。米國民中には多數のゲルマン民族が混在して居るので、內外呼應して極力親獨的風潮を作り上げやうとして居るが、元來米國民の多數を占めるものはアングロ・サクソン人種で、思想系統でも政治組織でも、全體としては獨逸よりも遙かに英國に近い。從つて米國の有識者は決して彼等の煽動に乘るやうな事をせぬ。若し獨逸が今度の戰爭に勝利を得るやうな事があつては、米國の地位にまで危險な影響を與へはせぬかと云ふ心配を抱く人々さへある。其等の人々のうち、最も鮮明なる態度を表白して、米國は獨逸に對して宣戰す可しと主張せる學者は、シカゴ大學のヘール敎授である。敎授は米國は此際斷乎として獨逸に宣戰し、獨逸をして再び起ち能はざらしめる樣にするのが米國百年の大計であるとなし、次の如く述べて居る——

獨逸は平和會議で議決された條約を蹂躙して平然として居る。凡そ此等の條約は、之に加はつた國民が、條約破壞者に對して宣戰するの勇氣ありて、始めて其の神聖を保つ事の出來るものである。單に獨逸がルーヴン市を破壞し、又は公海に水雷を布設した事に對して丈でも、米國は世界の平和の爲に獨逸に宣戰するの義務がある。米國は宜しく袖手傍觀の態度を改めて、他の世界的事業を爲しつゝある國民と協働せねばならぬ。吾等米人は宣戰布告と共に、獨逸の糧食を遮斷せねばならぬ。而して更に進んで武力に訴へて獨逸が人道に背ける事を自覺せしめねばならぬ。若し假に獨逸が戰爭の目的を達したりとすれば、吾等は獨逸あるが爲に常に戰爭を

主とする國民となつて居らねばならぬ。何となれば獨逸は必ずや南米を征服して、後米國に干戈を向けて來るに相違ないからだ。

敎授はこの意見を大統領及び上院議院等に送つてその贊同を求めた相である。

歐洲戰亂と回敎徒

獨逸は早くより巧みに土耳古を懷柔し、吾國は回敎徒の兄弟なりなどと揚言し、陸軍を改革し、內政を矯正して、再びバルカン半島の覇者たらしめんと欺いて、常に親土政策を取つて來たが、遂に土國を煽動して歐洲の戰爭に參加せしめた。黃禍論者のカイゼルが、回敎徒と同盟するのは實に一大奇觀と云ふ可きであらう。日本と同盟せる故を以て英國を非難せる獨逸學者は、何と之を辯解するか聽き度いものである。

土耳古が立つたと云ふ事は、非常に吾等の注意を惹く問題である。土耳古は今や波斯、埃及、阿富汗、印度、其他世界各地の回敎徒を蹶起せしめて、歐洲戰亂をして更に宗敎的大爭鬪たらしめんか、又は其の實力を暴露して歐洲大陸より全然驅逐せらるゝかの岐路に立つて居る。聯合軍側に於ても、土國の戰爭參加を重大視し、切りに機先を制して各地の回敎徒懷柔に努めて居るが、外電の報道は吾等をして將來を豫想せしめる程の材料を供給せぬ。獨逸側の公報では、阿富汗王が百三十五門の大砲を有する十七萬の大兵を以て印度の西北境に迫り、印度兵の之に應ずるもの尠なからずと言うて居る。また埃及の中堅を以て任ずる埃及青年黨は、常に埃及の獨立を企圖し、盛んに排英思想を鼓吹して來て居るので、英土が開戰すれば尠くも埃及青年黨だけは土國に味方するかも知れぬ。また印度に於ける青年回敎團も回敎の將來を憂ひて、先年のバルカン戰爭の時には、深厚なる同情を土耳古に寄せて居た。波斯の向背は土國に取りては最も重大なる關係を有するが、英佛側の公報によれば、波斯は土國の勸誘に對して戰爭を回避する方針のやうに見える。

要するに今度の戰爭に乘じて、世界に於ける回敎の不平黨が結束して立つや否やは疑問であるけれど土耳古が歐洲より驅逐せられて、非常なる迫害を受けるやうな事になれば、多數の回敎徒を激昂せしめ

て、或は將來の宗教戰爭の因由となるかも知れぬ。

伊太利哲學者のオイケン非難

オイケン教授は曩にトリポリ事件に際し、伊太利のミケル・アンゼロ・ビリヤ教授に一書を送り、伊太利の非行を責めた事があつた。然るに今や獨逸の今度の行動に對し、同教授はオイケン教授に一矢を酬ひて次の如き書簡を發した。

今回の獨逸の行動は、予をして一九一一年十一月貴下が予に贈られたる書簡を想起せしめた。貴下は當時獨逸國民の一人として、また貴下の良心が命ずる所なりとなして、トリポリ事件に於ける吾國の行動を非難し、『苟くも文明國民が、他の劣等民族に對して斯くの如き壓迫を加ふるは、斷じて正當の行爲に非ずと判斷せざるを得ず』言はれた。道德の師表たるオイケン教授よ、予は今日かのリエージュやナミュールに對して貴下の祖國が行ひし砲擊に關して、貴下の良心が何と告ぐるかを聽き度いものであると。

尙ほ同教授は獨逸の非文明的行爲に對し、世界の各大學が、相携へて抗議を提出せんとの運動を開始して居る相である。

押川春浪氏の葬儀

十一月十八日、雨寒く空暗き日であつた。此日午後二時より雜司ヶ谷齋場で行はれる押川先生令息春浪氏の葬儀に會する爲、一時過ぎに宿を出た。雜司ヶ谷に着いた頃から空は愈々暗くなつた。齋場の中では僕の目には向ふ側の人々の顏が見えぬ程であつた。一時間程待つて式が始まつた。讃美歌、祈禱、聖書朗讀、說教、吊辭と順々に濟んで行つた。最後に押川先生が立つて挨拶された。而して此の一場の挨拶によりて、此日の葬儀は双びなき悲壯なものとなつた。

さながら見えざる注連繩を廻せる如く侵し難き森嚴の氣に包まれたる先生の容貌のうちには、限りなき情愛が漲り流れて居た。一個の人格に於て、嚴肅と慈愛とが、かくまで見事に統一され得る事は、類ひ少なき例しである。總て人々は悲哀と同情との涙に咽びつゝ先生の言に謹聽して居たが、僕は人性に於ける神性の發現を鮮かに目擊して、寧ろ神々しき有難さの涙を注がざるを得なかつた。

天空海濶

讀孟子

木白生

孟子曰く、心を盡す者は其性を知り、其性を知る者は則ち天を知る、其心を存し其性を養ふは、天に事ふる所以なりと。孟子の本領は實に此の一句に盡きたり。而して鬱乎たる宋明の理學も、詮ずれば是を註するものに非ずや。彼の曰ふ心とは、猶ほ心靈と謂ふが如し。盡心とは本我を欺かざる事なり。大行加へず、窮居損せず、たゞ己が儘に在らんとする也。過去を懷ふに非ず、未來に依るに非ず、たゞ今日を天と共に榮えんとする也。盡心者は一時を永遠に舒べ、永遠を一時に攝す。時空の嵐は此處に吹かず、因果の彼は此處に寄せず、明日は爐に投げ入れられん露の命を、憂へもなく懼れもなく咲き誇れる野の花こそ、まさに盡心者の姿にてあれ。

孟子は五官並に五官より生ずる諸々の觀念をもて小なるものとし、之に從うて生くるを小人となし、心に從うて生くるを以て大人となしたり。夫れ善と云ふもの在るに非ず、唯だ心に從ふなり、唯だ路に從ふ也。この心を仁と謂ひ、この路を義と謂ふ。これ天の尊爵にして、人の安宅なり。この心を失ひ、この路を外にして在るものなし、人若し此心を失ひ